

こころの自己調整機能に関する研究

奥 田 亮

A Study of Self-Regulatory Function of the Psyche

OKUDA Akira

I. 問題と目的

1. こころの自己調整機能とは

一般に人格検査は、結果としてある個人に一つの人格像を付与する。例えばY-Gテストを施行したところ劣等感や抑鬱性が高く社会的外向性が低いと判断される、など。しかしそのように判定された個人がいつ如何なるときもその結果の通りであるとは考えられないであろう。時には全く逆の行動をとることもあるに違いない。桑原（1991）はこのような人格の二面性に着目し独自の質問紙を作成して、相反する人格側面が個人内に存在し得ることを示した。

『こころの自己調整機能 (self-regulatory function of the psyche)』とはユングの用いた言葉である。それは有機体が生理学的に自己調節（ホメオスタシス）的働きを有しているように、人間のこころ (psyche; 独語で Seele) にも意識が一面化しようとするときに均衡化を目指すような無意識的働きがあることを意味している。こころが一方に偏るのを脱しバランスを取ろうとして対立する側面が現れるという、二面性を力動的にとらえるような考え方である。同義の言葉として『補償』(compensation)があり、用語としては『補償』の方が使用頻度が高く、定義も明確でユング心理学ではテクニカル・タームとして確立されている。要するにこころが自己調整的に働くことが補償なので、以下では『こころの自己調整機能』と『補償』の両語を使って説明していくが、両者の間に決定的な差異があるわけではない。

2. 補償理論

補償という用語を心理学に導入して使ったのは A. アドラーである。彼は補償を器官劣等性などによる劣等感を補い克服しようとする心の動きの意味で使った。吃音を克服して雄弁家になったデモステネスがしばしば例に挙げられる。俳優によく言語障害や口の変性徴候があること、美術学校の考査で学生の70%に目の異状があったことなどをオグラ（1977）は指摘している。

一方ユングは補償を、劣等感を補う意味に限らず心的器官の自己制御として理解し、意識機能によって生じる構え全体の偏りを無意識が相殺する働きと考えた。補償に関するまとまった定義 (Jung, 1921) を要約すると、『人に意識される内容は（全事象のうちでも）限られた部分であり、その意味で意識の活動は選択的で、方向づけられている。そのため排除され阻止された内容

は無意識に沈むが、意識的な方向づけに対する反作用を形成する。意識が偏るにつれて、この反作用は増大して緊張をもたらす、無意識内容が夢や「勝手に浮かんでくる」イメージを通じて意識に伝えられる。意識の基本的姿勢の偏りがひどいと、無意識に由来する内容はより対立的になる。これは極端な場合で、普通は無意識による補償は対立的ではなく、意識の方向づけを相殺したり補ったりするものである。』補償の意義は次のように述べられている。『対立緊張のないところにエネルギーは生じない。』『それなくしては如何なる前進も不可能であるところの対立緊張が生じるためには、抑圧されたものは意識化されねばならない。…高さが常に低さを、熱が冷たさを求めるのと同様に、あらゆる意識はそれと気づかぬうちに無意識に対立するものを求めるのである。対立するものがなければ意識は抗いようもなく停滞、渋滞、硬直化へと向かう。人生は対立するものの閃光によってのみ生まれるのである。』(Jung, 1948)『ここでは、ちょうど身体がそうするのと同じように、均衡を維持する自己調節の体系なのである。プロセスがあまりに急激に進むと、必然的に補償が生じる。これなくしては、どんな正常な新陳代謝も、どんな正常なところもあり得ない。この意味において、補償理論は心的活動の根本原則と見なし得る。一方が少なすぎることは他方が多すぎるという結果を生む。』(Jung, 1934)。

意識が外向し過ぎた余り無意識が補償的に神経症的障害を起し、エネルギーを内向化させた幾つかの例をユング(1921)は述べている。ある男性が怪しげな女性を女神のように崇め奉り過大評価していた。ところが彼女といざ結婚する段になって神経性の食道痙攣を起し、一日に二杯のミルクしか飲むことができず許婚に会いに行けなくなり、自分の体を養生するだけで手一杯になってしまったという。ある歌手は名声が急に高まったためそれまでと違って自分では応じ切れないほどのエネルギーの支出を求められたときに、神経性の故障によって突然高い声がでなくなった。又、外向的感情が過剰に高まったとき外へと向けられた感情の優位を打ち壊すために「それは～にすぎない」というスタイルの思考がしばしば現れる(Jung, 1921)ことや、不快なほど高ぶった自負心・楽天主義を持って治療者を閉口させる患者が、背後に深い無力感・劣等感を持っていたり、極端に自分を低めること・小心・悲観主義的な諦めの裏に傲岸な権力意識が潜んでいる場合のあることも補償的な働きから指摘している(Jung, 1928)。こういった例を見ると、我々にとって臨床的にも補償という考え方が身近になってくるように思われる。

では実際に『補償』『このころの自己調整機能』は実験的に研究されてきたのだろうか。過去20年間をさかのぼって調べたところ『このころの自己調整機能』としての補償機能を扱った研究はほとんど見当たらなかった。ただし、夢は意識を補償している(Jung, 1948他)という論から夢の補償性を調べた研究が幾つかある。Dallett(1973)は被験者に感覚的単調さ、社会的孤立、過剰な社交、を刺激として与え、実験前と後での夢の変化を見た。仮説では夢がそれぞれの刺激に対して補償的内容を持つだろうと考えたが、結果は全く支持されなかった。しかし興味深い結果が幾つか見られた。刺激に深く関与していたいくつかのケースでは明らかに補償的な夢が現れた。社会的孤立と感覚的単調さの後では夢は有意に長くなった。実験後、刺激や実験に関する夢を見たのは内向型がほとんどだった。実験以前には内向型のほうが外的情景の夢を多く見ていた。Domino(1976)は被験者に施行した質問紙とその被験者の夢の内容とを比較した。結果は両者の間に正の相関があった。すなわち夢の補償性を支持せず、むしろ覚醒時の意識と夢での出来事がほとんど変わらないことを示した。可能性として、『ノーマルでうまく機能している個人には夢

の補償的側面は妥当性が少なく、心理療法患者や極端な群には妥当かも知れない』ことを述べて結んでいる。夢の補償性以外では Chalus (1976) が、男性性を脅かされたとき補償的に男性性誇示行動が増えることを社会心理学の立場から確認している。しかしこれらは相対立するこころの側面が均衡化する働きという点を正面から扱ったとは言い難い。

3. 本研究の意義・目的・方法の概略

先ほど補償の例を挙げた際に、臨床においても身近な考えと述べた。実際、ユングは補償機能と精神病理との関連性について数多く言及している。『神経症においては無意識が意識と激しく対立するため、補償が損なわれてしまう。したがって分析的治療は無意識内容の意識化を目的とし、その方法によって補償を回復させようとするのである。』(Jung, 1921)『神経症は均衡を回復させるために自己調節するこころの体系が行う試みなのであり、夢の機能と少しも違わない。ただし相当強烈で激烈である』(Jung, 1948)。補償機能が円滑に働いているときは無意識と意識の関係は対立的ではなく、相補的である。しかし意識面が偏向し無意識との関係が失われると、神経症のような暴力的な方法でもって無意識は意識を補償しようとするという。すなわち、補償を知ることはその人の病理を知るうえで役立つ可能性がある。このように臨床における有用性も見込まれるのだが、補償・こころの自己調整機能の研究は未だ殆どなされていない。そこで本研究では『補償』及び『こころの自己調整機能』に関する研究をおこなっていくことを主眼とする。ただし補償やこころの自己調整機能に関する先行研究が乏しいため、この論文ではこれらの理論の是非・真偽についてはひとまず置いておいて、実際に意識が偏った状況に入ったときに個人がどのような反応を示すのか調査・実験を行って現れた現象を観察・分析することから始めたい。その後、得られたデータをこころの自己調整機能や補償という観点から検討する。

具体的な方法は、内容がある側面を強調していると判断された物語を刺激とし、被験者にそれを聞かせ、聞いた後に刺激の物語の後に続くような物語を新たに創作してもらう。被験者は物語に聞き入ることによって、意識状態が偏った側面へと傾くであろう。そこでどのような物語を創作したのかを分析し、考察する。偏向した内容に対して反転したバランスを取るような反応が生じるのであろうか、そのような反応はごくまれなのであろうか。もし生じるのならどのような形をとるのであろうか。創作された物語を吟味して、強調された側面へと意識が傾いたときの反応内容を分析する。物語創作後には被験者がどれだけ刺激物語の世界に入れたか、創作物語がどれだけ自然に浮かんできたかについて質問する。これによって、偏った物語に意識が関与した程度と反応のスムーズさと創作内容との関連性について知ることができる。

刺激用の物語にはグリム童話を使用する。被験者にとって物語が多義的な意味を持つことは好ましくない。グリム童話は普遍的な要素を持つといわれる(河合, 1977)ので、聞き手によってあまりにもかけ離れた受け取り方をされることが少ないと思われる。また夢と類似した無意識的心的過程の表出ともいわれており、刺激として使うと意識レベルから無意識的レベルまでの様々な深さの反応が現れることが期待される。

Ⅱ. 方 法

1. 予備調査～刺激用グリム童話の選定～

【調査対象】心理学専攻の大学生・大学院生23名に配布，うち17名から回収。回収率73.9%。
(男6名 女11名 平均年齢24.8歳)

【材料】グリム童話冊子(グリム童話の中から予め17の物語を選択し，冊子にした) 物語評定用質問紙(形容詞対23項目からなるSD法と童話の偏りを尋ねる質問項目によって17のグリム童話各々を評定する質問紙)

【手続き】グリム童話冊子と物語評定用質問紙をセットにして配布，1週間前後で回収。

【結果】各物語について，質問紙の形容詞対23項目の平均値と標準偏差を算出した。形容詞対23項目について因子分析を行い3因子を抽出し，情緒性因子，評価性因子，活動性因子と命名した。以上の結果を参考に，次の4つのグリム童話を本実験の刺激用童話として選択した。『蜂の女王』：Positiveな情緒性の形容詞対への偏りが強い物語。『みそさざいと熊』：高い活動性の形容詞対への偏りが強い物語。『トゥルーデおばさん』：Negativeな形容詞対に少し偏りみられ，自由記述からは潜在的な偏りが予想される物語。『きつねと猫』：評定では中立的とされた項目が最も多く，偏っているという項目が全くなかった物語。

2. 本実験～物語の創作～

【被験者】大学生442名(男121名 女321名 平均年齢19.2歳)

【材料】刺激用グリム童話(テープ)，再生用ラジオカセット，物語創作用紙

【手続き】実験は集団で行われた。物語創作用紙を全員に配布し，次のように教示した。『これから4つの童話の朗読をテープで流します。ひとつの物語を聞いたら，その後にさらに続くような物語を自分で創作してください。そしてその内容をこの冊子の所定のページに記入してください。記入するスペースが足りないときには，そのページの裏面に続きを書いてください。創作する物語の長短は問いません。創作物語を書き終わったら，物語を記入する欄の下にある二つの質問に答えてください。これらのことを4つの物語それぞれの後に行ってください。一つの物語につき創作時間は12分です。制限時間内に物語を完結できたときには最後に《終》，出来なかったときには《未完》と書いて終わって下さい。』教示の手順に従って4つの物語についての創作物語を作ってもらい，用紙の最後に感想を書くよう求めた後，用紙を回収した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 結果の処理

創作された物語のうち最後に《終》と書かれた完結した物語(以後，完結物語と呼ぶ)と，《未完》と書かれた未完結の物語と，全く何も書いていない白紙の物語の3つに分けた。被験者442名のうち4物語とも完結していたのは227名(男62名・女165名)であった。うち女性165名からランダムに63名を選んで男性62名と合わせ，計125名を統計用群とする。

統計用群125名の創作物語各々4作，合計500作について3名の評定者がSD法によって評定を

行った。評定用の形容詞対は予備調査で使用された23対の中から刺激用グリム童話の特徴をよくとらえていた10対が選ばれた（FIG. 1参照）。3評定者の評定を0～4に得点化し、その平均値を統計用群の個々の創作物語の被評定値として以後処理する。すなわち統計用群の創作物語のみ3評定者の平均値を基にしたプロフィールを作ることができる。

物語創作用紙には物語創作後毎に『グリム童話を聞いているとき、どの程度物語の世界に入り込めましたか』及び『物語を作る段階で、どの程度創作物語が自然に浮かんできましたか』を聞く7件法による二つの質問項目を設けた。それぞれ0～6点に得点化し、前者の質問による得点をIT得点、後者をNC得点と呼ぶ。両得点を全ての完結物語について算出した。

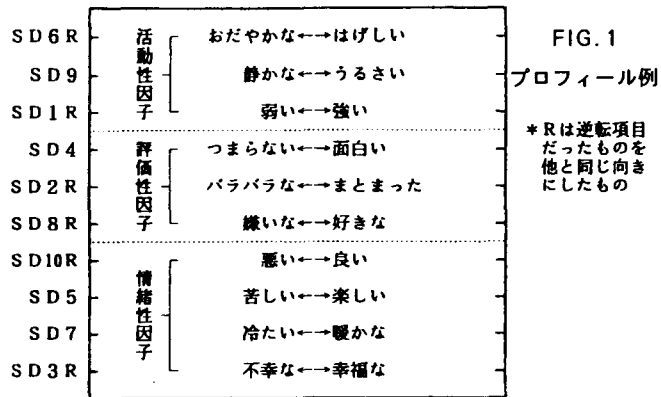


TABLE. 2.1 みそさざいと熊パターン分類

パターン	「表題」	内容
A	「そのまま」	みそさざいが熊に威張ったまま
B	「熊、反撃」	熊がみそさざいに反撃する (→ B 1～B 6)
	B 1	「熊、勝利」 熊が勝利を収める
	B 2	「熊、敗北」 再びみそさざいが勝ち熊が負ける
	B 3	「和解」 争った後、両者が和解する
	B 4	「全滅」 共に滅ぶ
	B 5	「永遠」 永遠に争いが続く
	B 6	「その他」 その他
C	「第三者出現」	争いが続き、第三者が現れる (→ C 1・C 2)
	C 1	「和解」 第三者の調停で和解する
	C 2	「全滅」 第三者により共に滅ぶ
D	「和解」	(反撃や争いが起こらずに) 両者が和解する
E	「みそさざい、受難」	みそさざいに不幸が起こる
F	「教訓」	教訓
G	「その他」	その他 (知恵者は勝つ、口は災いのもと、等)

TABLE. 2.2 みそさざいと熊パターン分布

パターン	A	B						C		D	E	F	G	合計
下位分類		B1	B2	B3	B4	B5	B6	C1	C2					
女	42	111						7		51	11	2	11	235
		46	17	32	3	8	5	6	1					
男	7	61						3		5	5	2	9	92
		34	6	9	4	3	5	2	1					
男女差	*女>男	**女<男								***女>男				
計	49	172						10		56	16	4	20	327
		90	23	41	7	11	10	8	2					

***p<.001 **p<.01 *p<.05

本稿では、4つの刺激グリム童話のうち『みそさざいと熊』『トゥルーデおばさん』から作られた完結創作物語について、内容・ストーリー展開・結末などによってパターン別に分類して、分析と考察を行う。

2. みそさざいと熊

【パターンと分布】

刺激グリム童話『みそさざいと熊』から得られた創作物語のうち、完結した物語全てをA～Gまでのパターンに分類した。さらに結末によってパターンB・CをB1～B6, C1・C2に下位分類した。これを表にしたのがTABLE. 2.1である。又、パターン別にプロフィールを作成して刺激童話のプロフィール(M-ORIGINAL)と比較した。

パターンの男女別の分布をTABLE2.2に示した。全体としてはパターンBの『熊, 反撃』が多く、その中でもB1『熊, 勝利』とB3『和解』が多かった。次いでD『和解』, A『そのまま』と続く。男女間の分布差についてカイ二乗検定を行った結果、パターンA『そのまま』, D『和解』は女性が多く(df=6, p<.05, p<.001), B『熊反撃』は男性が多かった(p<.01)。

【IT・NC得点】

パターンと男女別のIT・NC得点をTABLE. 2.3に示した。パターン間と男女間の2要因分散分析を行った結果、IT得点は男女間に差はなかったが、パターン間ではパターンCが他に比べて有意に得点が高かった(F(6,310)=2.56, p<.05)。NC得点では傾向として女性が高いという性差が見られ(F(1,307)=3.56, p<.10), パターン間ではやはりパターンCのみ他より得点が有意に高かった(F(6,307)=5.87, p<.001)。交互作用は共になかった。

【考察】

『みそさざいと熊』という刺激童話は活動性が高い『うるさい』『激しい』特徴をもっていると予備調査で評定された。これに対し反転したプロフィールを描いたのがパターンA『そのまま』とパターンD『和解』⁹⁾である(FIG. 2.4, 2.5)。両パターンともに活動性項目群が低く、ストーリーはこれ以上動きはないという展開でORIGINALと対照的である。これらの創作物語群には

結末で『こうして森は平和になりました』『森に静けさが戻りました』と結んでいるものが多数見受けられた。これは明らかに刺激童話の動きが激しく争いの多いことを受けて逆転的表現をしたと思われる。単に結末に平和や静かさを志向した現れという可能性もあるが、『平和』や『静けさ』といった表現が他の刺激童話に対する創作物語にはあまり見られない『みそさざいと熊』に顕著な現象であったことは注目すべきであろう。

一方、全完結物語の半数をしめるパターンB群³⁾は活動性項目群でM-ORIGINALと差がなく、むしろ似通ったプロフィールを示している(FIG. 2.6)。しかし、物語の内容を考えてみると、ORIGINALで一方的にやられてしまった熊がみそさざいに反撃することはまさに偏りを反転させる動きであるといえよう。激しさは共通のまま、ただし活動の方向が転じたのである。

IT・NC得点ではパターンCの点の高さが目立った。パターンCは熊が再び戦いを起こし、さらに混乱が続いた後に熊側でもみそさざい側でもない第三者が現れて対立する両者を統合(C2では全滅)してしまうというストーリーで⁴⁾、この物語が他よりもより刺激童話に没入し、より自然に浮かんで創作した結果できたという事実ははなはだ興味深い。対立と統合の物語がなぜ刺激に深く関与してごく自然に創作した後に生まれたか。これを、童話の世界に入り込み偏りを意識内に取り入れたことによって『補償』とその後の第三のものによる統合が自然なプロセスで起こった、と考えると理解できるように思われる。

以上のように『みそさざいと熊』では争いと平和、勝敗という大きく二つの側面で偏りからの反転が見られ、前者に女性が、後者に男性が多いという反応の性別差も現れた。また、刺激に関与度を高めることで、かなり補償的と思われる創作が生じることも認められた。この結果は、Dallett (1973) による夢の補償性の研究から得られた結果と同じであると考えられる。

TABLE. 2.3 みそさざいと熊パターン別 IT・NCの平均得点

パターン	A	B	C	D	E	F	G	全体		
IT	女	3.32	2.99	4.14	2.96	2.82	3.50	2.80	3.06	
	男	2.71	3.02	5.33	3.20	2.00	3.00	2.00	2.92	
	男女平均	3.23	3.00	4.50	2.98	2.56	3.25	2.42	2.99	* C>全て
NC	女	2.15	2.72	4.14	1.96	1.91	2.50	2.60	2.45	
	男	2.00	2.47	5.00	1.20	0.40	1.00	1.33	2.19	†女>男
	男女平均	2.13	2.63	4.40	1.89	1.44	1.75	2.00	2.32	*** C>全て

*** p<.001 * p<.05 † p<.10

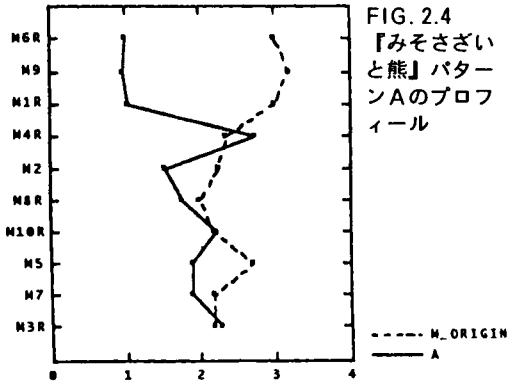


FIG. 2.4
『みそざいと熊』パターンAのプロフィール

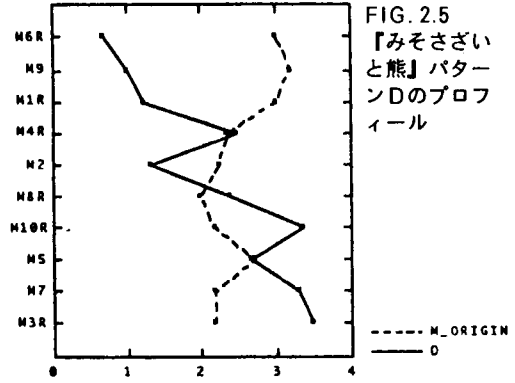


FIG. 2.5
『みそざいと熊』パターンDのプロフィール

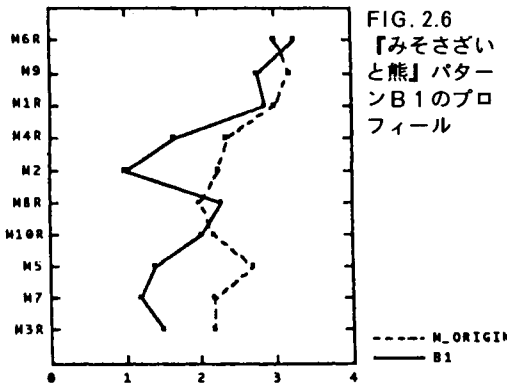


FIG. 2.6
『みそざいと熊』パターンB1のプロフィール

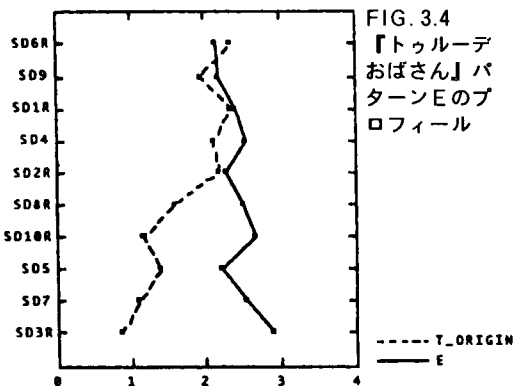


FIG. 3.4
『トールデーおばさん』パターンEのプロフィール

3. トールデーおばさん

【パターンと分布】

完結創作物語をA～Jに分類した。さらに結末によって下位分類を行った (TABLE. 3.1)。男女別の分布表が TABLE. 3.2である。各パターンのプロフィールを作成した結果、大きく分けて情緒性項目群で T-ORIGINAL と対称的プロフィールを示すパターン (B・C1・D1・E・F・G) と、それ以外の T-ORIGINAL に纏わり付くようなプロフィールを描くパターン群があった。

分布では、もっとも目立つのはパターンA『そのまま』の多さである。次に多いのがD『両親が助ける』、C『娘反抗』と続く。カイ二乗検定ではB『娘改心、助かる』で女性が多く ($df=9$, $p<.01$)、F『夢』で男性が多かった ($p<.05$)。

【IT・NC得点】

パターン×男女別の IT・NC 得点表が TABLE. 3.3である。この2要因の分散分析を行ったところ、IT・NC 両得点で女性の方が男性よりも有意に得点が高いという結果が出た ($F(1,306)=4.33, 5.87$, 共に $p<.05$)。NC 得点ではパターン間に差が見られ、パターンCがAよりも有意に高得点であった ($F(8,306)=3.88$, $p<.001$)。交互作用は認められなかった。

【考察】

プロフィールが T-ORIGINAL に対して反転していたのはパターンB・C1・D1・E・F・

Gである（例えばE, FIG. 3.4）。それは結末が ORIGINAL の救い様のなさとは対照的に、小娘が助かり、心を入れ替え、晴れて家路につくからであろう。しかし、各パターンの内容を見ると、同列において論じることはできないように感じられる。

まずパターンB⁹⁾の『娘改心、助かる』に関して。T-ORIGINAL が予備調査時にSD法で評定された際「この童話でどのような側面が強調されているか」という質問を併せて行った。この時最も多かった答えは「親のいうことを聞かないと酷い目に遭う」という点であった。パターンBは一見結末が転じて娘が助かりめでたしめでたしで終わるが、改心することで結末を回避したに過ぎず、“親のいうことを聞かないと酷い目に遭う”を裏返した“素直な子は助かる”という物語であって表面的にひっくり返っているだけで本質的には変わっていない。言ってみれば“浅い”反転であり、不幸な結末に対する防衛という印象を受ける。

パターンC1では娘がトゥルデーに昂然と反抗して魔法を解き、家路につく。『みそさざいと熊』で見られた勝者の逆転に似ている。パターンC3になると、実は『娘も魔女』で「今度はお婆さんの番よ」などと言いながらあべこべにトゥルデーを棒きれに変えて燃やしてしまったりする。魔女という特徴を共有しつつ、立場が鮮やかに逆転している。

TABLE. 3.1 トゥルデーお婆さんパターン分類

パターン	【表題】	内容
A	【そのまま】	そのまま娘は燃え尽きる
B	【娘改心、助かる】	娘が「親の言うことを聞く」と改心すると、魔法が解けて助かる
C	【娘反抗】	娘がトゥルデーに反抗する（→C1～C4）
	C1	【魔法が解け助かる】魔法が解けて娘は無事家に帰る
	C2	【道連れ】娘はトゥルデーもろとも焼け死ぬ
	C3	【娘も魔女】娘も実は魔女で逆にトゥルデーを燃やす
	C4	【その他】その他
D	【両親が助ける】	両親（又は片親）が助けにくる（→D1～D3）
	D1	【魔法が解け助かる】魔法が解け無事家に帰る
	D2	【両親も棒きれ】両親も棒きれにされ燃やされる
	D3	【助けられない】両親は娘を助けられない
E	【第三者が助ける】	第三者が助け、魔法が解ける
F	【夢】	実は夢だった
G	【再生】	娘は灰になり、大地に蒔かれて植物に生まれ変わる
H	【教訓】	教訓（親・人の意見は素直に聞こう、等）
I	【その他】	その他（娘も魔女にされトゥルデーと暮らす、娘の悪心が燃える、等）

TABLE. 3.2 トゥルードおばさんパターン分布

パターン	A	B	C				D			E	F	G	H	I	合計
下位分類			C1	C2	C3	C4	D1	D2	D3						
女	55	33	31				46			22	7	5	2	34	235
			15	6	8	2	33	9	4						
男	28	3	14				14			10	8	3	2	10	92
			6	3	4	1	4	5	5						
男女差		**>男								*男>女					
計	83	36	45				60			32	15	8	4	44	327
			21	9	12	3	37	14	9						

** p<.01 * p<.05

パターンD⁹⁾は『両親が助ける』という内容である。ORIGINALの“親のいうことを聞かないと…”という要素は親の統制する面・罰する親の像を表している。それに対してDの両親は護ろうとする親のイメージを持っており、異なった親像の側面を表していると言えるだろう。河合(1977)は刺激童話の『トゥルードおばさん』に関してユング派の立場から解説している。それによれば、トゥルードおばさんは母なるものの元型的イメージ、太母(グレートマザー)の呑み込んで死に至らしめる否定的な側面をあらわしているという。この点から考えると、パターンDの両親は娘を救い護り育もうとする肯定的な側面と同時に、グレートマザーのような普遍的イメージに対して小娘一個人の現実的な両親像を担っていると言えるだろう。深い太母イメージに呑み込まれようとする娘を現実レベルの親が助けようとすることも、一種の補償ではないだろうか。又、河合は『トゥルードおばさん』は「否定できない事実」・いかんともしがたい(just-so-ness)ことが存在することを表現しているとも述べている。『トゥルードおばさん』の創作物語の結末にパターンA『そのまま』が多かったのは、この“いかんともしがたさ”を目前にして物語を展開できなかった被験者たちがいたためではないか。

パターンEの『第三者が助ける』で小娘を助ける第三者は様々である。娘の姉妹兄弟・正直者・村人たち・勇者・天使など、中にはトゥルードおばさんの曾ての夫“フォールステおじいさん”が現れる。これらのうち多くは小娘かトゥルードと反対の性質をもったものである。対立する性質の者によって逆の結果を生じさせるという展開である。

パターンF¹⁰⁾では実は娘は『夢』を見ていたのであって、目が覚めて助かったという物語である。どうしようもない結末を『夢』に押し込めることで解決するというやや抑圧的な内容であるように感じられた。この物語に男性が多く、回避防衛的と思われたパターンBで女性が多かったことは面白い。防衛の性差であろうか。女性の場合、回避傾向はハッピーエンド志向と関連しているかもしれない。

T-ORIGINALが『夢』であるとする創作物語はパターンFだけでなく他にも少なからず見られ、これは『トゥルードおばさん』が夢につながるような、とりわけ無意識に近い元型的要素を含んだ物語であることを示唆している。被験者の感想の中には「自分の見るこわい夢そっくりだ」

というものがあり、また『娘は燃やされ、魔女伝説は語り継がれてゆく』と創作した後にわざわざ「物語としてはおもしろくないが、自然にそう思った」とコメントする者もいた。このように『トゥルーデおばさん』が変えがたい普遍的性質をもっていることが伺える。全体からの考察で『トゥルーデおばさん』が読み手の心に何かを惹起させると述べたことはこのことにつながると思われる。中でもパターンG『再生』は分類した内で最も印象的な物語群であった⁹⁾。燃やされ灰となった娘が大地に蒔かれ、植物として転生する。まさに『死と再生』の物語であると言える。刺激童話『トゥルーデおばさん』の持つ要素がこのような物語を引き出したのではないだろうか。

このように『トゥルーデおばさん』の創作物語は非常にバラエティーに富んだパターン分類がなされ、深い元型的イメージからの反転と思われるものから表面的な裏返しまで、様々なレベルの異なった創作が見られた。

4. 総合的考察と今後の展望

個々の創作物語をパターン別に分類して分析を行い、様々な層での反転現象が見いだされた。一口に反転と言っても実に多様な側面・形式・水準で起こることが分かったのである。また、反転はただ単にそれのみ起こるだけでなく、しばしば何らかの共通点をもって生じている。完全な分裂ではない。反転することは相反しあうその線上でつながっている。このことは補償が意識と無意識の橋渡しをすることと比喩することができるように思われる。偏りをとらえそこで反転することで一度終わった物語を再開することは、対立から生み出される前進ではないだろうか。

男女間では反転の仕方が異なることがたびたびあった。総じて言えば、女性はどちらかという和部分的・局所的な反転が多く、明らかに幸福・平和志向である。男性は全体をひっくりかえすような丸ごとの反転をする傾向がある。このような性差は今まで問題にされておらず、今回の研究で新たに明らかになった点と言える。

偏りのあるものに対してバランスを回復させるような反転的創作が観察されたことを、直ぐに『こころの自己調整機能』の動きに結び付けることはできないであろう。展開しない貧弱な反応や、むしろ防衛機制的打ち消しに近いように思われた創作パターンも存在した。しかし一方で、対立するもののモチーフや統合の物語が現れ、それらが『こころの自己調整機能』や『補償』によってより良く説明し得ることも確かである。ともあれ反転が現れることは確認された。人がある偏りに対して均衡化を目指す動きをとらえることができた。そしてその反転や均衡化は方向性・形式・水準などいろいろな側面で異なった形で現れることが分かった。これらのことを明らかにできたことは、今後の『こころの自己調整機能』や『補償』の研究にとってスタートとなる、非常に意義のあることだと思われる。

創作物語のパターンと創作する者の personality の間に関連性があるかどうかは興味深い問題である。反転するしないだけでなく、同じ展開でもストーリーの方向性によって創作した被験者の性格が違ふように思われる。例えば『みそさざいと熊』で一方向的に敗れた熊が反撃したと創作しても、熊が勝利を収めるのか、やっぱりまた負けてしまうのか、最終的に和解するのか、双方とも全滅するのか、それぞれで随分イメージが異なる。『トゥルーデおばさん』ならば、両親が助けに来て娘を救い出すのか、両親までも棒きれにされてしまうのか。他に防衛的な反転のように感じられる物語群もある。これらの反応を、他の人格テストの結果と比較して個人個人の被

験者のpersonalityとの関連を見ることができれば、『こころの自己調整機能』に関してより深い考察ができると思われる。そしてその結果いかんでは、今回の実験のような物語創作法を一つの心理検査として使用することも可能であろう。と同時に問題と目的で述べた『こころの自己調整機能』の健全さと病理との関連性について資料を与え得るかもしれない。今後さらに調査・研究して行きたい点である。

註

- 1) グリム童話『みそさざいと熊』『トゥルーデおばさん』のあらすじは以下の通り。
 『みそさざいと熊』：鳥の王と呼ばれるみそさざいのすみかを、熊が「貧弱だ」と馬鹿にしたことがもとで、飛ぶ軍団と四つ足動物軍団との間で決戦が行われることになる。みそさざい率いる飛ぶ軍団は策を使って勝利し、熊はみそさざいの雛たちの前で土下座をさせられる。
 『トゥルーデおばさん』：親の言うことを聞かない娘が、両親が止めるにもかかわらず、悪い魔女と言われるトゥルーデおばさんのところに出かける。そこで娘は、トゥルーデおばさんに魔法で棒切れに変えられ、火にくべられて燃やされてしまう。
- 2) パターンD『和解』の創作物語例：『熊はみそさざいの巣にケチをつけたことを心から反省し、みそさざいも熊があやまってくれたので熊を許し、四つ足軍団と空飛ぶ軍団は仲直りをした。森に再び平和がもどり、みそさざいの歌声がひびきわたっていた。』
- 3) パターンB1『熊反撃、勝利』の創作物語例：『ひな鳥たちが飲めや歌えのどんちゃん騒ぎをしているの指をくわえてみていた熊は、くやしくてくやしくてならなかった。そして逆襲するなら今だと思い、再び四つ足の動物たちを呼びよせて、酔っぱらってぐったりしている鳥たちがけて反撃した。驚いた鳥たちはちりちりになって逃げていった。鳥の后と王は怒った。が、もう後の祭りだった。生意気なひなどりは、熊にとらえられ、熊に謝れと言われたが従わなかった。そのため、怒った熊はひなどりを焼き鳥にして食べてしまった。』
- 4) パターンC『第三者出現、和解』の創作物語例：『だが熊はおもしろくない。何とかひなたちの鼻をへし折ってやりたかった。そこでスパイの蚊を抱きこんで、にせの情報を流させた。「4つ足軍団が大勢群れをなしておそってくるぞ」。宴会をしていた鳥軍団はあわててにげだした。「これで気がすんだらう。」あらわれたのは長老のためきだった。「下手な意地のほりあいはやめなさい。みんな仲よくしましょう。」こうして森は平和になった。』
- 5) パターンB『娘改心、助かる』の創作物語例：『炎の中で小娘は必死に叫んだ。「助けて!!」そうすると、トゥルーデおばさんは言った。「おまえはどうしてここへ来たんだい。何かいいことはあったかい。」小娘は「うん。ごめんなさい。何かおもしろいことがあると思って。でも、お母さんは行くなって言ったんだ。私が悪かったんです。お願い助けて。」すると、トゥルーデおばさんは言った。「これからはちゃんと親の言うことを聞かさい。」娘が「うん。」と言うと同時に、娘は自分の部屋に戻っていた。』
- 6) パターンD1『両親が助け、魔法が解け助かる』の創作物語例：『娘は、どうにかしなければと思うが、どうしたら元の姿に戻れるのかわからない。娘は心細くなってなき出した。そこへ、心配してかけからこっそり見ようと娘の両親がやってきた。娘のなき声を聞きつけ、トゥルーデおばさんに、どうか娘を返してくれるようにと頼んだ。トゥルーデおばさんは「いいだろう、お前達が元に戻せるようなら、返してやるよ。」と言い、たき木となった娘を渡した。両親はそれを見て、どうしてこんな姿になってしまったのかと、涙をこぼした。その涙が娘の上に落ちると、どうしたのか娘は元の姿に戻ってしまった。娘は、自分が両親の言うことをきかなかつばかりに大変なめにあい、その上両親までも悲しませてしまったと反省した。その後、娘は素直になり、両親といつまでも幸せに暮らした。』
- 7) パターンF『夢』の創作物語例：『小娘は目が覚めた。これは夢だったのだ。「夢の中で、親の言うことを信じていうとうりにしていれば、あんなこわい体験をせずに済んだのに、これからはきちん

と親の言うことを信じて、良い子になろう」と小娘は思った。その後、この小娘は、町でも評判の素直な良い子になりました。』

- 8) パターンG『再生』の創作物語例：『その炎はやがて消え、一にぎりの灰ができた。トゥルーデおばさんはその灰を外の灰捨てにすてた。灰になってしまった娘は後悔し、親のいうことをよく聞けばよかったと思った。その時、突然激しい風が吹き、灰になった小娘は風にとばされとばされて、その一片が彼女の家の庭先についた。家では母親と父親が彼女のことを心配して右往左往していた。それを見た小娘は心からなげき、改心した。少しはこの家族の力になりたい。そう思ったとき、その灰から芽が出て木になり、なんとも不思議な花がさいた。翌朝それを見た母親は、おどろいたが事のなりゆきをさとった。父親と母親はこの木を大事にし、また木になってしまった小娘も毎朝きれいな花をさかせ、両親をよろこばせた。ある日、そのきれいな花が大きな大きな実をみのらせた。その実がじゅくすと、その実は落ち、落ちた実の中から小娘があらわれた。両親と小娘はよろこび、その後すえ長く、仲よく幸福にくらしました。』

引用・参考文献

- Chalus, G. A. (1976) Defensive Compensation as a Response to Ego Threat. *Psychological Reports*, 38, 699-702.
- Dallett, J. O. (1974) The Effect of Sensory and Social Variables on the Recalled Dream. *Dissertation Abstracts International*, 34 (11-B) 5705-5706
- Domino, G. (1976) Compensatory Aspects of Dreams. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 658-662.
- グリム, J.・グリム, W. 池内紀/訳 (1989) グリム童話 (上)・(下) ちくま文庫
- Holmes, D. S. (1971) Compensation for Ego Threat: two experiments. *Journal of Personality and Social Psychology*. 18, No. 2, 234-237
- 井上正明・小林利宣 (1985) 日本におけるSD法の研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 *教育心理学研究*, 33, 253-260.
- ユング, C. G. 林道義/訳 (1987) タイプ論 みすず書房 (Jung, C. G. 1921 *Psychologische Typen*. Valter-Verlag.)
- ユング, C. G. 松代洋一・渡辺学/訳 (1995) 自我と無意識 第三文明社 (Jung, C. G. 1928 *Die Beziehungen zwischen den Ich und dem Unbewußten*. Darmstadt, Reichl)
- Jung, C. G. (1934) The practical use of dream-analysis. C. W. 16 139-162
- ユング, C. G. 高橋義孝/訳 (1977) 無意識の心理 人文書院 (Jung, C. G. 1943 *On the Psychology of Unconscious*. C. W. 7)
- 河合隼雄 (1977) 昔話の深層 福音館書店
- 河合隼雄 (1994) 昔話の世界 岩波書店
- 桑原知子 (1991) 人格の二面性について 風間書房
- オグラー, H. 西川好夫/訳 (1977) アドラー心理学入門 清水弘文堂
- サミュエルズ, A.・ショーター, B.・プラウト, F. 山中康裕/監訳 (1993) ユング心理学辞典 (Samuels, A., Shorter, B., & Plaut, F. *A Critical Dictionary of Jungian Analysis*. Routledge & Kegan Paul, 1986)

(博士後期課程2回生, 教育臨床心理学講座)